

コラム

サウジアラビアの Falih エネルギー相が OPEC デビュー

戦略研究ユニット 国際情勢分析第1グループ 研究主幹 松本 卓

6月2日にウィーンで第169回のOPEC総会が開催された。開催前から、まずは当面の目標として経済制裁（禁輸）措置が発動される以前の原油生産量および輸出量までの回復を目指し、現状での増産凍結を受け入れないスタンスを固辞するイランと、イランが増産凍結を受け入れない限りOPECとしての増産凍結も無いとの基本スタンスを堅持するサウジアラビアという構図によって、総会では生産目標に関する決着はつかないと予測されていた。そして、今回の総会では事前の予測どおり「何も決着がつかなかった」。それどころか、総会後の声明では生産目標についての言及はなく、足元の原油価格が\$50/bbl近辺まで上昇してきている余裕からか、「今後の市場動向を注視し、必要に応じて加盟国に開催を呼び掛け、必要な対策を講じる」とした。

このような経緯から、今回の総会では生産目標に関する合意内容よりもむしろ、サウジアラビアの新大臣に対する注目が集まっていた感がある。5月7日にサウジアラビアのSalman国王による勅令で同国の省庁再編が発表され、併せて閣僚等の人事異動によって、長年サウジアラビアの石油政策およびOPECなどの国際舞台で尽力してきたNaimi大臣が退任し、新しいエネルギー大臣が誕生していた。それが、Khalid A. Al Falih大臣である。新大臣としての初舞台を踏むFalih大臣が、OPEC総会でどのような行動をとるのか、多くの人達から注目されていたのは間違いないであろう。

Naimi前大臣は、任期中一貫して可能な限りエネルギーと政治問題を切り離してサウジアラビアのエネルギー政策を推進してきた、と見る向きが多い。また、OPEC内でも各国の意見を聞き、丁寧に対応してきたとの声も多く聞かれ、非OPEC産油国ならびに消費国とも必要な対話を続けてきたとされる。しかし、退任間際には、昨年4月に就任したMohammad bin Salman Al Saud副皇太子兼国防相（この他に経済開発評議会議長、Saudi Aramco最高評議会議長も兼務）が同国の政策決定により大きな影響力を揮うようになり、石油政策の決定にも直接の影響力が行使されるようになったとされることから、Naimi前大臣の立ち位置にもその点から大きな注目が集まるようになっていた。

こうした時期に、新たに就任したFalihエネルギー相が迎えた国際市場での初舞台がOPEC総会だったのである。筆者は実際にOPEC総会に出席した訳ではないので、メディ

ア報道等に基づく見方であるが、複数の OPEC 関係筋が明らかにしたところによると、**Falih** エネルギー相の融和姿勢でイランとの対立が激化する状況は避けられたとされている。即ち、サウジアラビアをはじめ複数の加盟国が、OPEC の重要性の復活や市場シェア争いの終結などを目指し、OPEC 全体の新たな生産枠の提案を試みたとのことである。なお、この点で、イランは新たな全体生産枠の設定を支持しないとした上で、各国の割当量について議論すべき、と主張したとされる。そしてイランは、歴史的な生産水準に基づけば OPEC 全体の生産量の 14.5%を生産できると発言したとされている。

イランの目標値を改めてハッキリと引き出すことが出来たとするならば、今回の OPEC 総会での議論における一つの成果と言えるであろう。即ち、**Naimi** 前大臣による「相手との対話」という手法を、**Falih** 大臣も踏襲しているとも見ることができよう。現在のサウジアラビアの政策決定の状況を見ると、政策の本質的な部分は **Mohammad** 副皇太子から出されるのかもしれないが、その方針に従って **Falih** 大臣が発信するものは、相手の言い分を聞きながら穏健なものとなっていくのかもしれない。

総会直前に、朝の散歩と称して **Naimi** 前大臣が記者団に対しサウジアラビアの考え方などを話していたそうであるが、**Falih** 大臣が総会后に、記者からサウジアラビアの石油政策について質問を受け、「サウジアラビアは非常に穏やかに対応し、いかなる状況でも市場を驚かせることはしない。したがって、今後サウジアラビアが原油供給を大幅に増やすことはない。」と明言したことも見逃せない。

いずれにしても、以前に比べて OPEC の力が弱くなってきていると言われているが、サウジアラビアという石油大国が執る石油政策が、世界の石油需給バランスや原油価格の変動に与えるインパクトを持っていることは確かであり、同国のエネルギー大臣の一言はその背後に窺い知ることができるかもしれない副皇太子の意も含め、目が離せないであろう。

お問い合わせ : report@tky.ieej.or.jp